6. 韓国水素エネルギー学会について

前会長　太　田　時　男

１９８９年の１０月７日，韓国水素エネルギー学会会長金吉煥氏から，同学会の発足記念に第１回の研究発表会を行うに当り，私にKey note addressをお願いしたいので，１１月２５日(土)に，KOFST(The Korean Federation for Science and Technology Societies)までお出いたゞけるかどうかの問合わせがあり，ちょうど勤労感謝の日と続けて大学の業務を休む期間が24日だけですみそうなので了承した。

韓国は，今年小春の暖い日が続き，キムチに酸味がつくので出来が悪く，それが品薄を招いて物価全体を押上げているという人もいた。

発表会は李相洙・KAIST院長の開会の祝辞に続いて私が「水素エネルギー」という一般的展望で最近の研究開発の世界の動向について話した。言葉はすべて韓国語，予稿もハングルで閉口したが，私は日本語で講演を行い通訳された。

総合報告は２件あり，一つは尹景錫氏（KIST）の「水の光電分解」，他は燃料電池でKICT（建設研究所）の人であった。

一般講演は１４件（１件当り１５分間）で，水のＳ－Ｉ分解サイクル（原子力研）２件，光触媒３件で，金属水素化物が圧倒的に多く７件あった。同学会副会長の李在英（KAIST）の$LaNi_5$を用いた重水素分離やアモルファス層の研究は注目に値するもので，またヒートポンプの研究も相当進歩しているものと考えられる。水素自動車（内燃機関）の研究はKIMM（機械研）の崔準変氏がレヴューした後，今後の計画について話した。

全般的にみて，実験室規模での科学的レベルの研究は国際的に損色のないものと認められたが，応用面は燃料電池でも水素エンジンでも今一つという感じを受けた。また，意欲が高く，熱心で，その点は申し分ないが，工業界の関心が，ほとんど皆無で，発表会にも出席者がいなかった。ちょうど，わが国の昭和３０年代の初期を思い出す。如何に産学協同（一部では進んでいる由だが）を積極化していくかにこの学会の将来がかかっているように思う。

１９７９年４月，韓国物理学会の招待で訪れて以来１０年振りのSeoulであったが，街の近代化が進み，高層ビルや自動車の普及とともに物価の高くなったのも驚いた。同学会の全幹部の他金基衡氏（韓国科学基金会長，前科学技術庁長官）など多くの科学技術界の主脳とも親しく懇談できたが，今後日韓両国が水素エネルギーの一般への普及のため協力することで合意した。

１９９０年７月２３日からハワイで８ th WHECが開催されるが，その間，折をみて日韓両国の

参加者の合同懇談会を催したいと思っているので，読者諸氏には是非，ご参加頂き度い。

註－KAIST(Korean Advanced Institute for Science and Technology)。韓国の全大学の理工系学部出身者をテストによる選考でよりすぐり，一ケ所に集めて大学院英才教育をする，大学院大学である。効率が高く，成果を挙げている。

KIST (Korean Institute for Science and Technology)。一般研究者の高度の研究を，ここへ集中して行っている。レーザー研究に重点が置かれ，テーマは多様で，低温核融合の研究もみられた。KAISTに隣接して設置され，この一帯は韓国の科学研究のメッカである。

(1989・12・25)